

浄土

1985-8

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別徴収部課長）第三五号
昭和六十年七月二十五日印刷 昭和六十年八月一日発行
第五十一卷 八月号



乙丑夏
小林
治

宝珠

舞見御中署

埼玉工業大学 松川 文豪	淑徳中学校長 淑徳高等学校長 里見 達人 〒174 東京都板橋区前野町五一四一一	鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田 祐規 〒862 熊本市九品寺三一一一	学校法人 芝学園 理事長 豊岡 益人 学校長 徳久 鐵郎
東山学園長 石井 俊恭 〒606 京都市左京区永観堂町五一	上宮学園 理事長・学園長 鵜飼 隆玄 高等学校長 鵜飼 光順 〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一五六	神田寺（旧法禅寺・安良寺） 学校法人 真理学園・神田寺幼稚園 友松 諦道 〒101 東京都千代田区外神田三二四一〇 電話（〇三）二五一八六八三〇五	法然上人降誕聖地 美作 誕生寺 岡山県久米郡久米南町 電話（〇八六七）二八一二二〇二
鎌倉大仏殿 高德院 佐藤 密雄 〒248 鎌倉市長谷四一二二八	大原山 西福寺 鵜飼 隆玄	萩市 常念寺 老隠 古本 超然	寺内 大吉

八月号



無量寿仏に八万四千の相あり。
——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

無量山小景……………遠 田 弘 俊……(2)

特 別 寄 稿

母とお寺さま……………久 保 幸 江……(18)

=いのちをはぐくむ III=

仏がこころに染まる……………小 西 祐 謙……(12)

ず・い・そ・う……「つくづく」法師抄

盂蘭盆会のあとさき(続)……………真 野 孝 信 ……(7)

<ナムナム童話> (1)

ナムナムさんがきた……………ぬのむらてつや……(22)

み仏とともに = 5 =

——苦しい小僧修行——……………安 居 香 山 ……(27)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第14回……………寺 内 大 吉……(32)

枯れ葉がまねく

挿絵 松澤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

無量山小景

無量山と言えば伝通院寿経寺の山号であり、芝、三
縁山増上寺に並ぶ浄土の名刹として、関東十八檀林の
随一に教えられていた。江戸の川柳に「寿経寺と小石
川中探しけり」と、寿経寺の名は一般には通用されて
いなかったようである。その寿経寺が伝通院だと聞け
ば誰でも成る程と頷くことであった。その伝通院も江
戸時代には誰もが呼び捨てには出来ず、必ず「伝通院
様」と、サマ付けにしなければならなかった程格式を
重んじたようである。特に浄土宗として伝法（一宗僧侶
の肝心の法を得える）道場であり、明治時代までは宗学



とおだ こうしゅん
遠田弘俊

(東京・文京区慈眼院住職)

の場でもあったことは周知の通りであり、今猶往昔の
語り草が遺されている。特に伝通院の名称の起源は此
の地に、徳川家康公の母堂「於大」の方を葬り、その
菩提の為に建立されたことに依るものである。その法
名伝通院殿蓉蒼光岳智香大禅定尼の院号を寺号に冠し
て、伝通院様ということになった。

委しくは、無量山伝通院寿経寺と云えば成る程と合
点のゆくことであらう。

宗祖大師御降誕八百五十年を記念して。伝通院略誌
が三井知明氏に依って編纂せられ、寺務所から刊行さ

れている。勿論浄土宗全書を繙けば総べてを知ることが出来るであらう。然し今回刊行された小冊子に依れば、世に知られない多くの墓碑、知名の先哲、先賢の墓塔のあることに改めて驚くことであり、心ある人々の参詣の絶えないのも宣なるかなと思う。実は私が此の度「無量山小景」と題して貴重な誌面をさいて頂いたことは、或いは一笑に附されることであるかも知れない。然しこうした由緒ある大坊に而も格式を誇る寺院に正史の上では殆んど認められない、俗間の伝説が或いは寓話が消えようとしていることも否めないことである。一例を挙げれば総本山知恩院の御影堂の軒の垂木に残された左甚五郎の忘れ傘、或いは勢至堂の奥に祠られている濡れ髪明神の伝説等、他宗では文福茶釜の狸等々、枚挙に遑がない。凡そ現代の科学の世界では採るに足らない茶話にもならない物語りが、案外に民衆の巷間に流布して根強く伝承されていることに今さらのように思いを新たにす。閑話休題、爰に古来伝通院の七不思議なるものを数えて、読者の皆さんに慰めとなれば幸いである。今七つの不思議と云つても、明確にこれこれ七つだとする根拠も記録もある

訳ではない。古老の物語りとして何となく伝えられていることを今の内に書き止めて置きたいと思つたものであり、読者の皆さんには、或いは他愛のないことと受取られることであるかも知れぬ。

先づ第一、伝通院貫主の晋山式。第二、山門基段の切腹の台。第三、山内大黒天福聚院の底無しの井戸。第四、昌林院当らずの摺鉢。第五、山内比翼墓。第六、鳴かずの蛙。第七、門前稲荷そばと狐——以上。

これを物語りとして、第一の貫主晋山式と言えは何かの記録があると思うが前述のように伝説として聞いて頂きたい。先づ旧幕時代無量山では入山式は夜中に行われたとのこと。その式には何処から練つて来られたか、一応大門から中雀門に向つて進んで列の先頭が到着すると、開門の式が行われる。その時、前後の式衆供奉の者はその場で止まつて、貫主一人が本堂に向つて歩を進める。此の際に誰にも見えないにもかかわらず、貫主の眼に写る御先導がある。それは他ならぬ一山の鎮守澤蔵司稲荷の僧形の姿である。徐ろに本堂の向拝の段に近づくと共にその姿が消える。此の時先

導の僧形が仄かな灯明の光に浮んで緋衣を着ていられる場合と、紫衣を着ていられる場合とがある。もともと伝通院は賜紫衣の寺として住職たるものは一生紫衣で終るべきものであつて、緋衣は許されなかつたようである。そこで御先導の僧形の稲荷が緋衣である場合には、此の貫主は増上寺、或いは知恩院へ進董することの出来ることを暗示し給うたのだと、それと共に紫衣の場合は此の山で一生を終えられるということを知らされるのであると。これは、澤蔵司稲荷の縁起に因んだ一連の伝説のように思えるのである。

第二、中雀門基段の切腹の台。現在は、今次大戦に焼失してその在処は明らかではない。此の門の主柱の基礎に一畳位の角材が両方に出張って据えてあつた。何処の山門にも見られぬものであつた。此の台段こそ此の門の建立に因んだ説話であつた。これを建てた当時の棟領が檀林寺院に相応しからぬ構造を設計して、流れ勾配ではなく、一段格式を高く勅使門的唐破風として造営を進めたのである。此の時、彼は万一幕府の咎めに遭えば此の門と共に命を懸けようと、予め切腹台を造つたのだということで、此の基段の出張りこそ

棟領の心意気を示したものだといえるかも知れない。

第三、山内大黒天福聚院の底無し井戸。此の井戸の所在は現今では不明である。何故に井戸に底無しの名がついていたのか。伝説とはそこに面白さがあるといえる。大黒さまと底無しの井戸、汲めども尽きぬ福の御利益、参詣者の群集に与えた当時の盛賑が眼に見えるようである。

第四、昌林院の当らずの摺鉢。これも戦前まであつた。大摺鉢半畳敷もあつたろうか。此の摺鉢で、どれほどの味噌を摺つたものか。数多の学僧達の給食の爲であつたか。それとも単なる入れものであつたか。当らずの摺鉢という名の通り摺粉木の使える程のものではなかつたようだ。

第五、比翼塚(夫婦塚)学寮として栄えた伝通院の一角に、珍しくも男女一对の墓として、磯五郎・お初的心中物語りであり、特に二人の相思相愛の象徴として遺された墓塔にまつわる説話も、何か無量山としては不思議な現実と言いたい。これも知る人ぞ知る。

第六、鳴かずの蛙。一言で蛙が鳴かぬということの不可解は何か。無量山一帯に一切蛙の声が聞えぬ。往

昔開山聖岡上人が現在の久堅町の宗慶寺の辺りに草庵を結んで浄土の法門を研鑽され、多くのお弟子を養成しておられた。無量山には開山の伝記にまつわる説話が数多く残されているが特におもしろいのは鳴かずの蛙ということである。或る月の明るい夜、辺り一帯が氷川の田圃といつて水田の広々とした地域であった。

余りにも蛙の音が騒々しく、弟子達の仲には特に勉強の妨げになるとこぼす者があつて、上人にこのことを訴えたものである。すると上人は「お前達がそんなことで勉強が出来ないようでは困ることじゃ。強いて言うならば何とかしよう」と、上人は一夜呪文を唱えて蛙の声を封じられた、ということ以来附近一帯には蛙が鳴かぬとか。現在の宗慶寺には極楽水という碑が立ち、昔の情緒は殆んど見ることが出来ない。時代の変遷を思ふばかりである。上人は通称三日月上人と申して眉間に三日月の紋様があり、当時三日月信仰が世に広く行われて、現に境内にも三日月不動尊の石像があつて、道行く人の信仰を集めている。これも遠く上人との縁りがあるやに想像せられる。余談になるが、今次戦禍によつて失われた伝通院界限の中で石に刻ま

れたものとして残存する碑文も少くはない。中に山内澤蔵司稲荷（無量山鎮守）境内に、明治・大正時代の俳人、芭蕉堂公雄翁の「月影にしのぶや声のなき蛙」という堂々たる句碑のあることは、鳴かずの蛙の伝説に縁るものであらうか。

最後に七不思議の第七、門前稲荷そばと狐の民話に就いて。此の物語りは、昔伝通院の中興正誓廓山上人の時代、一山学寮中、極山寮（寮頭極山上人）へ一修業僧が訪ねて来た。此の僧が後に稲荷の化身として神変自在の能力を発揮して大衆を驚かし、やがて一山の鎮守澤蔵司稲荷と奉祠せられることとなる。此のことに就いて貫主入山の折に触れたことだが、それ以来無量山には稲荷に因んだ寓話が数多遺されているわけである。特に江戸時代には伊勢屋、稲荷と何とかで、江戸市中に多いものの中に数えられていたものである。

いつの頃からか門前にそばを商う店があつた。そのそば屋に毎日のように一人の僧が現われてそばを食して帰るのである。然しその日に限って必ず勘定の鳥目の中に木の葉が混っている。主人が何とも怪しいこと、訝つて、丁稚に僧の後をつけさせる。すると件の僧が

例の稲荷山の裏の洞穴の前で消え失せたのである。さては稲荷の狐の仕業と思ひ、翌日には彼の僧の店に来るを待つて体よく断つたのである。するとその僧が店に姿を見せなくなった日から、ぶつとりと客脚が止つた。驚いた主人は早速彼の僧の消えた稲荷山に詣で、懇に前非を謝して、今後は永く献上することを約束して再度店の繁昌を招いたという。

江戸古川柳に「沢蔵司天ぶらそばがお氣に召し」とある。この説話は今も尚人口に膾炙して余りにも有名である。

一応無量山小景として七不思議の一端を記して、伝説は伝説であつて或いは何等取るに足らぬことであるかも知れないけれど、こうした民間の「むかし噺」として遺されている楽しい物語りも、世の中が進化するに連れて薄らいで、兎角荒唐無稽として一笑に附せられようとしていることが不思議の中の不思議とでも言えようか。特に無量山伝通院の七不思議の説話は、檀林学寮を背景としたものに縁することの多いのに気付くことではあつた。

台掌

村瀬 秀雄 著

|| 好評新刷 ||

三部仮名
鈔の全訳

『念仏の要諦』

B 6判 二九七頁 価二九〇〇円

|| 好評 ||

『和訳浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和訳上人選訳集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和訳大師觀經四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳大師六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

『全訳上人勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

◇◇◇ず・い・そ・う・・・「つくづく」法師抄◇◇◇

盂蘭盆会のあとさき(続)



真^ま野^の孝^{こう}信^{しん}

(八幡市正法寺住職)

伝承行事は、その由来に基いて制度化され、民族や地域の習俗となり、或いは宗教的信仰として、遠き祖先の純な想いと足跡が、その生きざまの無形文化として、更には、典礼的要素に根ざす行事のための

の什具類が、貴重な文化遺産として時代の推移とともに変化しつつも、年毎の気候の移り変りの目安となった二十四節気や雑節に合せて、風物を利用して子孫や地域に承け継がれているもので、ただに協賛行事にとどまらず、大自然の営為(いざ)に抱かれて生きつづけ、人の力では、到底及びつかぬ願意を、神仏の加

護に至禱するものであって、全ての行事に通う厳粛な元意にこそ、尊い宗教的自覚をよぶ行事と観ることができる。

偕而、お盆の終る十六日は、所謂精霊送りである。迎え火を焚いて還来の精霊を供養する全ての行儀を了えて、仏処(冥府)にお見送りする行事で、送り火と精霊流し(燈籠流し)に代表されるものである。中でも、京都五山の送り火が有名で、如意ヶ岳の大文字・松ヶ崎の妙法・明見山の舟形・大北山の左大文字・曼荼羅山の鳥居形が順次点火され、京の

地形を利した観光行事となっている。これも三、四十年前までは、五山の送り火の全てを一望できる場所も散在したが、今では林立するビルに遮ぎられて、その二、三が眺望できる屋上をもったホテル等は超満員となる盛況を聞くが、夜空に浮ぶ送り火を遠望して合掌遙拝し、焚き火の燃えつき、暗に帰るまでの見送りに、尽きぬ名残りをとどめる追想は、精霊まつりのフィナーレに相容しい。

又精霊流しとして、河川の流れに燈籠を浮べ。追善回願の中を精霊を送る火点し舟の群が、流波に揺れて、淡い燈火を川面に映しつつ、次第に川下に遠ざかり、やがて闇に没して視界を断つ送別も、精霊の安らぎを願う追慕の情を合掌に秘めた懐しい盂蘭盆行事のフィナーレである。

精霊送りの行事を、風物詩的な観方をすれば、絵葉書の解説や観光案内書の叙述のようであるが、行事遂行現場は大へんである。如意ヶ岳に点火される大文字にしても、その山腹に七十五個の大きな火床があり、その一々に井桁に積まれた松割木に点火されて、大の字形とされるが、五山それぞれの所属寺

院では、志主の願意によって塔婆や護摩木による供養の法会が修せられ、山腹の火床に運ばれて聖火にあげられるのであるが、これ等の施火も、伝承行事なればこそと想われる。

盂蘭盆の行事として盆施餓鬼が行われるが、施餓鬼会は、釈尊の十大弟子の中でも、その随侍二十余年に及び、一切の仏法を受持して、多聞第一と云われる阿難尊者の故事によって修せられる法会で、惡道に墮して飢渴に苦しむ衆生に、飲食を廻施する供養の法会であるから、施食会とも謂うが、彼岸会を彼岸施餓鬼として厳修される場合もあり、本来は時期を定めず、又、川施餓鬼や道施餓鬼等、随所随所で奉修されるが、『救拔焰口餓鬼陀羅尼經』の所説に依つて、その由来と法会の内容を通して、施餓鬼会奉修の功德が、如来不測の神呪力（法語を唱誦して、施主や先亡靈位の福業利生を願求する咒願の威力）に由る所以を信奉させていたきたい。

ある時、阿難尊者の前に焰口餓鬼が現れて、『命期（寿命の期限）の三日であることと、死後の餓鬼道に墮ちる』ことを予言した。懊惱する阿難の致請に

応じて釈尊の垂範説示せられたのが、施餓鬼会の法会である。これは、墮地獄特に餓鬼道に墮ちて苦界に沈淪する亡者に、法力をもって飲食を施与し、その功德をもって祖霊をはじめ、有縁無縁一切の諸霊の冥福を薦める為に法会を興すのである。従って、盆や彼岸に限らず、年忌法要や慰霊追悼を施餓鬼の法をもって奉修するのが本来の儀軌であつて、目連尊者の故事に基く盂蘭盆会と、阿難尊者の故事に由る施餓鬼会は、別の法会である。

施餓鬼会は、祭壇を外陣に設置して五如来を奉安し、香華燈明及び靈膳を供えたと共に、その背後に餓鬼壇を別に設けて三界万霊の牌を安置して、盛飯や淨水、菓果を供えて、五色の五輪幡や小幡を立て、招鬼施食の構を整えて法会の旨趣を敬白し、破地獄、淨食加持の偈を唱え、普集餓鬼（広く餓鬼趣の霊を招く）、変食、甘露水等々の呪文（陀羅尼）を唱えて、呪願の妙用（不思議な力）をかりて施物の供養が容易に餓鬼の飲食の欲を満すこととなり、祭壇に安置した五如来の仏徳を讃歎してその徳化に浴し、仏法僧の三宝帰竟の上、これらの善根功德をいたたい

て、一切の餓鬼の苦果をまねいた罪障の消滅し、苦境を離れて安楽の境越を獲得し、菩提の証果を得て、淨土に超生の上成佛せしめ給えと願つて回向される法会である。その徳化に浴す五如来の仏徳は、

○宝勝如来——慳貪業（物を惜みむさぼる心とその行為）を消除して、その人がらを福智円満ならしめたまう。

○妙色身如来——醜陋形（醜いかおかたち）がなくなつて、円満な相好の身とならしめたまう。

○甘露王如来——身心に仏法の灌ぎをいただいて、

快楽を授けたまう。

○広博身如来——細つた咽喉（食物や空氣の通る道）を廣大にして、飲食の類が何でも充分に受け入れられるようにせしめたまう。

○離怖畏如来——恐怖のすべてが除かれて餓鬼の惡趣（苦惱の境域）を離れしめたかう。

それぞれの徳化に浴して、施餓鬼の利益を蒙るのは、自他兼濟（施者も被施者も共に救われる）の妙法で、精霊は三途（猛火に焼かれる火塗——地獄道・自他相食む血塗——畜生道・刀、剣、杖などで強迫される刀

塗―餓鬼道の三惡道）の苦境を脱して善趣（六趣の中の人・天）に生じ、人は現に五福（人生五種の幸福―壽命長久・財力豊富・無病・好徳・天命終焉の五福）を招き、やがては、有形の形相莊嚴と清淨の心をもつてする最も勝れた根本となる無形の莊嚴の、二種莊嚴を身心にそなえた徳者として得しめ給うと説かれてゐる。総じて阿弥陀仏摂化の慈光に浴して生きる念仏行者の、自他法界同じく利益し、共に極樂に生きて仏道を成ずる道を得させていただく大会である。

その他、夕涼みの空に、大太鼓の音の相間を縫うように河内音頭や伊勢音頭が聞こえて来る八月の風物。それは所謂盆踊りである。盆踊りは盂蘭盆に各戸に迎えた精霊を慰め、更にはこれを送る為に、近在の老若男女が相集い、広場に組み立てた中央の檣太鼓と音頭取りに調子を合せて、浴衣姿で手拍子揃えて踊る行事で、念仏踊が輪踊の形をもつて発達したものと謂われるが、この起源についても、目連尊者が盆会奉修の結果、墮獄の母が救われた善びに、じつとして居れず踊った故事に倣うものとも伝えられ、盆会にまつわるものではあるが、殆んど娯楽的

なものとなつて居り、その踊りも手の振りや足運びも簡単な繰返しで、容易に参加のできる大衆踊りとして、二三日は夜毎に開演される伝承行事である。

八月二十二日から二十四日迄の三日間は、六斎念仏と謂う念仏踊が行われる京都空也堂の行事で、空也上人（天台宗空也派の祖）が、桂川畔の松尾明神に参詣して念仏されると、明神はこれを悦び、神社の鰐口と太鼓を施与されて、一般世間の衆生利益のために、これを用いて念仏を勧めたまえとのお告げをいただき、大衆勸化や有縁無縁の弔霊に、これを打ち鳴らして神慮に報じ、念仏を弘通し、特に踊躍念仏（念仏踊り）として、毎月の六斎（惡鬼横行の厄をさけ、斎戒する）日に、鉦や太鼓に合せ、節をつけて唱えながら踊る行事となり、空也堂の外、壬生寺等に於ては、現在も八月の行事として参詣人も多い。

盂蘭盆会とともに、二十四日は地藏菩薩の縁日で、特に盆月の縁日には地藏盆が行われる。地藏菩薩の信仰は、平安時代の後期には貴族の間で特に盛んとなり、鎌倉期に及んで、武士階級や一般庶民の間にも普及し、各地の寺院でも祀られるようにな

り、その不動は大地の如く、内に慈悲忍辱の心を藏す代受苦（身替り）の菩薩として信仰を聚め、特に、六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道の六道）能化の菩薩とし、亡者を救う菩薩としての基本的な信仰思想と、盂蘭盆信仰との必然的結びつきから、古くから地藏盆の行事は行われ右手に錫杖を持し、左手の掌に宝珠を乗せた立像の菩薩も、金仏・木仏・石仏等、何れもその童形は子供守護の菩薩として、延命・夜這・腹帯・子育等、庶民の願意をこめた名詞のもとに信仰され、最近では流産や中絶の水子に対する親達の懺悔滅罪の想念と、その追悲は水子地藏の建立と信仰を盛んならしめているのも、世相の一端を物語るといふことが出来る。古くから『背の子は夢路を廻る地藏かな』の川柳にも察せられるように、六地藏巡りの伝承と共に、夏の宵を彩る紅提灯の数多い献灯や盛り沢山な供物に飾られた菩薩の前に行われる百万遍念仏の珠数繰りや、子供本位の行事や施菓の仕来は、寺院や辻堂にとどまらず、貸し出し地藏を祀って臨時に催される町内会や、団地の自治会が催す天幕下の行事も、信仰を

そのけこした町内和楽の娯楽行事的な今日の盛況であるが、親も子も親しめる盂蘭盆の行事として、地藏菩薩本願經の説意が、伝承行事の中に秘められて、大衆教化の一助となっていることは有難い。

七、八月の行事を一瞥して、人の欲望の絡みあい、が渦を巻いて流れ、弱肉強食は集団徒党の競闘とも謂える不穏な雲行きの中に、第二十世紀の終末を迎えようとしている昨今、科学文化はその発達とともに、いよいよ人間性の疎外に傾き、人命軽視の風潮は、長寿社会の到来を素直な喜びとなし得ず、開発の営為は必ずしも人間の根本的福利を招くものともならない矛盾を抱えて進められてゆく余儀なさに、不安の歲月は人を待たず、人間一度の生涯に、せめてもの時節に即した人界の慣習行事の一端を、『つくづく』味う私であるが、称名怠らず、無量寿光の大生命に摂取されゆく順次往生の道程であることを確信悦びして、ささやかながらも事々に懸命の余生は、事の成敗を超えて有難く感ぜられる。

(つづく)

(法)

(話)

いのちをはぐくむⅢ

仏がここに染まる



小西祐謙

(上宮高等学校副校長)

今ほど、「いのち」が論じられている時代はなかったのではないだろうか。

「いのちを考える」「いのちを感じる」「いのちに生きる」「限りなきいのち」「いのちを見る」などなど、いたるところで「いのち」という字が目につく。まさにいのちの時代である。

宗教はもともと「いのち」の問題と言えるから、生命が云々され、されてきたのは当然であるが、最近やや流行の感じを受けるのは私ひとりであらうか。

◇

◇

先日NHKテレビの「こころの時代」で放送された染織家志村ふくみ女史の「いのちを紡ぐ」というお話は、近頃になく味わい深いものであった。

志村さんが藍染めを志し、永年苦勞を重ねて技術を磨き、いろいろと人生の機微を経験する内に自然に「いのち」を実感されるというお話である。

私の母の郷里が紀州で、むかし親戚に藍染を業とする家があり、広い土間に沢山の甕が埋め込まれそこで太い糸の束がくり返し染められていた情景を覚えてゐる。かめから出した糸の色が違ってゆくのが不思議で仕方がなかった。「藍は生きているんだ」と聞かされたがその意味のわからうはずはない。ただ藍と聞けばなつかしい思いがよみがえる程度で藍や染色に全く無知であった私に、この日の「いのちを紡ぐ」という放送はまことに大きな感銘で、恐らくいつまでも私の心に残るであらう。

◇

◇

天然の色は「いのち」である。それを教えてくれたのは藍であった。

藍やあかね、くちなしのような天然の植物染料を使って糸を染める時、その色は染める人や染料そのものが出すのではなく、その奥に、人を離れたあちら側の自然の大きな力があって、それが醸し出す。技術（知識・工夫）だけの問題ではなく、人の知恵を超えた大自然の「いのち」が色彩となって現われてくる。また、染める人にも伝わってくる。

藍は生きているし、「いのち」そのものである。

志村さんが染色を志した時、「藍を染めるには子供が一人出来たと思いなさい」「藍は人間を映す」と教えられたがその意味が理解できなかった。それが、仕事を通じてだんだんと

わかつて来た。

自分が染めるんじゃない。自然には「いのち」が遍満している。天地自然の「大いなるいのち」に気付いた時、向う側から、色だけでなく、はかり知れない深いものを自然が見せてくれる。心が「いのち」に染まり、いのちを感じることで向う側に神の配剤というか、何かがあるように思えてきて、仏に接する思いが実感として感じられるようになったという。

この日のきき手で、ゲーテ研究家の京都大学高橋義人助教授は「ゲーテは、思索する人間の最高の幸福は探究できるものは探究しつくし、探究できぬものは静かに敬うことであると言っているが、志村さんが、藍色のしごとを通して自然の大いなるいのちに対する畏敬の念を深められていることは大きな驚きです」と感想を述べられ、話は更にゲーテの色彩論に及んで、彼のことばがいくつか紹介されながら話が進められていった。

最後に高橋助教授が言われた。

「志村さんの作品には『いのち』が写し出されている。志村さんは自然のいのちを染め出され、自分自身のいのちを紡いでおられる」と。

○仏はいのち

「沙漠は生きている」という映画があったが、生きているのは沙漠だけではない。藍だけが生きているでもない。人間も、山川草木、四季の移りかわり、人の世の相、すがたこれみな天地自然、

宇宙の大生命の躍動でないものはない。

「如来はいのちの根源という表現」もある。真言密教の根本仏、大日如来もその呼称の通り太陽を代表とする大宇宙の実相を象徴している。

この大生命を感じてこそ「生かされている」ということが解るし、「生かされている喜び」も生まれてくる。「限りなきいのち」永遠の生命ということも実感として受けとれるようになる。

○ハイと言えない

阿弥陀仏のアミタとは、量ることが出来ないという意味のことはであるから、阿弥陀仏はまさしく「限りなきいのち」である。

法然上人の南無阿弥陀仏の教えは、結論は簡単だがまことに奥深いもので、いろいろの角度から味わなければならないが、次のことがその要であることは間違いない。それは「考えるな」ということであり、「ひたすら念仏を称えよ」ということである。

考えるなというのは、余計な考え方をするな、理屈をこねて勝手な考え方をするな、素直な心を持ってということであり、ひたすら念仏を称えよとは、つねに念仏を口に称えながら生活しなさいということである。

理屈ぬきで何かやれといわれても「ハイ」といえないのが人間の常、現代人には尚のことである。

それを承知であえてそれを言われている。一枚起請文きしょうもんに明示されている通りである。素直に「ハイ」と言えないお互いだからこそ四六時中口に称えながら生活の生活を送りなさいと訓されたのである。

念仏を称えながらの生活とは、つねに仏と共にある生活、一時も仏と離れることのない日常である。

疑問を感じてもよい、忘れることがあってもいい、忘れたら思い出して続けなさい。眠ってしまつたら目がさめた時に続けたらよろしい。

こうしていつも仏と共にいる生活がだんだんと身についてきて、自然なものとなってくれば、「限りなきいのち」や仏の光明がその生活の中で実感できるようになる。そこでは念仏の意味や阿弥陀仏の無量寿無量光は、考えずして領解りやうげ（わかる）している。それは釈尊の説かれた悟りでもある。そうなると、私たちの住む世界は、娑婆しやばは娑婆ながら今までとはちがった別の世界として映ってくることになる。

○仏の聲が

彼岸は無限の彼方になるが、また近くにある。

ゲートの話に限らず仏書のどれを見ても考えさせられることばかりである。心さえ開けば、「向う側」に何かが見える。心を澄まし耳をすませば仏の聲が自然に聞こえて

くるに違いない。

仏に手を合わす人は多い。しかし、仏もわれを見給うと受けとれる人は少い。法然上人は、念仏を単に仏を拜む動作に終らせないためにつねに口に称える念仏を説かれたのである。

◇

私たちはみんな「仏性」(仏になる性質)を持っているから、心を開けば「いのち」に触れ仏に会うことができる筈であるのになかなか悟れないのは何故であろう。

知恵が足りないのではない。邪魔をしているのはその知恵であり慾が災いしている。貪(むさぼり)、瞋(いかり)、痴(おろか)の「三毒」ということを聞いておられるであろう。青酸の毒どころではない。これらこそ本当の「毒」なのだ。と仏教は説いている。

◇

◇

生きものの人間のこと、ある程度の欲望や衝動はやむを得ないが、他人を傷つけ自分までも損うことは慎まねばならないし、過を犯した時に素直に反省することがもつと大事であると教えられている。法要の差定(儀式の次第)の中に必ず懺悔(げんげ)の文が入っているのもそのためであり、懺悔の心こそ仏教の肝要である。

自分を正当化しようとする勝手な知恵やおごりの心を戒められた法然上人の教えをじっくり味わうことによって、私たちも本当の「いのち」に触れることができるであろう。仏様の方からきくと感じさせてくださるという法然上人のおことばを私は信じている。

Ⅱ 特別寄稿Ⅱ

母とお寺さま

母の五年忌を迎えて月日の過ぎてゆく事の速さをしみ感じる今日この頃、母の法号に因んで植えた梅の木は今年も又、満開に咲きました。

母は渋谷の日赤病院へ一年間に何度も入退院をくりかえしましたが、最後の入院の時真夜中の病室でだんだん小さくなってゆく母の顔を見ながら、早く元気になるようにと細くなった母の手をさすっていますと、口をきかなくなった母が突然大きな声で「とうちゃん早くむかえにきて」と叫びました。若くして父と死別した昔の事を思い出しているのか、気丈な母が父の事を今迄何も言わ

く ぼ ゆき え
久保幸江
(コロムビア・レコード専属歌手)

ず私達を育ててくれたその心の奥に母の本当の姿を見た様な気がしました。私は思わず「神様仏様どうぞ母をお助け下さいませ」と両手を合わせ一生懸命祈りました。日赤病院は大きな病院で、まるでホテルの様でした。物音一つ聞こえない真夜中に隣の病室が急に騒がしくなり、看護婦さんが出たり入ったり、往復する足音が激しくなり、胸に入れた手帳にでもつけているのだろうか前を通る度にチリンチリンと鈴の音が聞こえてきました。その中バタバタと先生らしき足音がひびいてきました。しばらく看護婦さんと先生そして家族の方の声が入り混

つて聞こえてきましたが、やがて御家族の方のすすり泣く声が伝わってまいりました。

病院の夜もようやく白々と明けてきました。私は母がよく眠っているののでロビーに出てみました。そこには御両親か御兄弟の方かうつろな目で口も聞かずうつつむいて居られました。肉親の死に直面する事はどんなに悲しい事だろう本当に人事とは思えませんでした。

私も早くに父を亡くし母の手一つで大きくしてもらいました。強くてきつい母でしたが、そのお蔭で一人前の礼儀作法を身につけることが出来ました。

私は小さい頃はガキ大将で近所の男の子を集め木登りや、メンコ等して遊びよく泣かせたりもしました。何時も謝まって歩くのは母です。女の子らしくない私を見てか三味線を習わせてくれました。小学校六年生頃から先生のかわりに教えるに行く様になり「可愛い先生」と云われ可愛がられました。

その後名取りになり、一生懸命に三味線に打ち込みました。大東亜戦争が始まり兵隊さんの慰問に戦地にも行き、終戦でシンガポールから引揚げてきました。

日本の国を知らない台湾生まれの姉妹を連れて母はど

んなに大変だったでしょう。引揚船の中で雪を見た事のない私は、「雪ってどんなにして降るの?」と隣にいたおばさんに聞くと「赤や青の色をした綿のようなものが空から降ってくるのよ」とからかわれ、「本当に?」と、母に聞き、母はただにこに笑っていました。今考えますと、その時母はきっと日本に着いたらどうして生活したら良いのかを苦労して考え事をしていたのでしょう。

母は小柄でよく働く人でした。何時も何かしている母しか見た事がありませんでした。私はコロムビアレコードに新人募集で入社していろいろ苦労しましたが、その頃は経済的に楽ではありませんでしたので、舞台に出る着物から何から何まで母の手一つでしてくれ、どんなに大変だったろうとしみじみ思いました。舞台出演や旅に出かける時は何時も母と一緒に、そこはこの方がよい、ここはこれが良い、といつもアドバイスしてくれて舞台の横で見えてくれました。良いマネージャーであり、着付係であり、仕立屋さんでもありました。アイデアマンの母は舞台衣裳を色々と考え、外国的センスでお客様の驚く着物を手作りですくつくしてくれ、今だにその着物を着て、テレビや舞台に出ております。その着物を着

ると母のふところの中にいる様な気がします。アメリカ、ハワイ、ブラジル、と何時も一緒だった母が八十二才で亡くなりましたが、年に不足はない、お目出度だと慰めて下さる方もおられました。私達子供にとっては百歳までも生きてもらいたいと願うのみでした。皆様方の慰めが嬉しいやら悲しいやらで涙の毎日でした。

母の眠る川崎の善教寺様の和尚様がとても優しい御立派な方で、私の母を想う心を汲んで下さいまして、墓参り度毎に御本堂でみ仏様のお話しをして下さいました。

御本堂の阿弥陀様の前で南無阿弥陀仏を唱えておりますと、母がそこにいる様な気持ちになり心が安らぎます。

或る日和尚様の輪袈裟に徳川將軍家の三つ葉葵の御紋が入っているのに気付きました。テレビ劇の水戸黄門様で「控えおろうこの紋所が目に入らぬか」で助さん格さんが見せる御紋入りの御印籠を思い出しました。私は葵の御紋と浄土宗とどんな関係があるのか不思議に思いました。そんな折、妹の近所の浄土宗のお寺様に三つ葉葵の御紋の入ったお倉が寺内にあると聞きましたので、行って見る事にしました。

妹は鎌倉の大船に住んでおり、そのお寺は岩瀬の大長

寺と云うお寺で、立派な門を入ると石段の巾が十メートル余もあり往時の隆盛をしのばせます。十数段の石段を上ると左側に土蔵造りの古い建物が小高い所に建っていました。両開きの扉に大きな三つ葉葵の御紋がついており屋根の破風の所にも紋がついていました。それは堂々として、あたりを威圧するかのようです。右手に御本堂がありその左奥につるべ井戸のお水屋がありました。

横の道をだらだら登ると小高い丘となり、そこからは大船平野を始め、遠く富士山、丹沢山、箱根そして高尾山、大山まで一望のもとに見ることができました。そして手の届くような所に玉縄城跡の山が見えました。

私はその日から浄土宗の檀家の一人として、浄土宗と三つ葉葵の御紋との関係を調べて見たいと思いました。

大長寺の創建は北條綱成公ですが、すぐ近くに曹洞禅宗のお寺で龍宝寺というお寺がありますが、このお寺も北條氏の建てたもので、玉縄城主三代の墓地があり大長寺と関係のあることがわかりました。天正十八年小田原城落城の時、北條氏政公と氏照公が戦の責を負って自刃し、替って小田原城は徳川家康公が豊臣秀吉から関八州と共に与えられ、その年の七月入城しましたが、支城で

ある大船玉繩城主北條氏勝公は死守する覚悟を決め、攻撃に備えていました。しかし玉繩城の攻略に当った家康公は、本田忠勝を速やかに開城する様説得に当らせたが氏勝が応じないので、忠勝は家臣の松下三郎左衛門の伯父が龍宝寺の住職良達和尚である事を知り、和尚に城主氏勝公を説得させる様依頼し、良達和尚は同じ玉繩北條家に縁のある大長寺の源誓上人と共に開城すすめに当りました。始めは聞き入れなかったがついに二人の和尚の説得に従い、天正十八年四月氏勝は頭を丸めて墨染めの衣姿で家康公の陣屋に降伏開城の旨申し入れ、大船玉繩城は無血で城を開け渡し、城兵約七百人と領民も戦火にかゝることなく済んだので、家康公は親戚筋の松平正次に土地を与え玉繩陣屋を造りました。正次は良く領民を治め、大船千石と云われるほどの豊作に力を入れました。

家康公は玉繩開城の功により大長寺の源誓上人を、家康公ゆかりの三河の大樹寺の住職として迎え、又大長寺には寺領として五百石と五丁四方の水田を寄進したといえます。これで大長寺に三つ葉葵の紋入りのお倉がある理由がわかりました。

立派な和尚様の力で戦火も受けず、家康公の善政で大

船の領民は以来平和な生活が送れたといえます。家康公も又浄土宗を信仰し、その発展に力を入れたといわれています。

今迄お寺のことは何も知らなかった私も、こうして少しづつ勉強してゆく心算です。

母もお寺参りが好きで、一緒に仕事で旅に出ますとよくお参りいたしました。

よく母の夢を見ますが、蓮のうてなの上にすわりにこにこしている母、極楽浄土にいたのでしょうか。阿弥陀様の前で御念仏を唱えながら極楽浄土とはどんな所かと想像しながら心の安らぎを覚えるこの頃です。

お寺様に参り阿弥陀様のお顔を拝ませて載っておりますと、にこやかなお顔、すましたお顔、こわいお顔、その時々に変って見えるのは自分の心をうつして下さるためでしょうか。親の長生きを願う心は結局我が身の老を教わることにつながり、生きて行く事の大切さをしみじみと知らされるように思います。

私も何時の日か母のもとに行くであろうその日まで、朝な夕な御念仏を唱え、心安らかに生きて行きたいと思っております。

ナムナム童話 (1)

ナムナムさんがきた

ぬ・の・む・ら・て・つ・や

「もうようちえんへ行くのはいや。」

泣きながら おうちへかえってきたのは
かよちゃんです。

いつもは げんきのいいかよちゃんなので
すが 夏やすみがおわって ようちえんへ行
くようになってから ちょっとおかしいので
す。

ながかった夏のおやすみで ようちえんに
なれないのだろうと おかあさんはおもって

いました。

でも――

「あしたから ようちえんへ行かない。」

てさげカバンをほうりなげて泣いているか
よちゃんに おかあさんも しぶしぶいいま
した。

「いつものかよちゃんらしくないわよ。まえ
のように ニコニコかよちゃんになってちよ
うだいよ。」

「いやいや ニコニコかよちゃんなんて だいきらい。」

「じゃ どうしてようちえんへ行くのがいやなの。おしえてちょうだい。」

「いやだから いやなの。」

「こまったかよちゃんだこと。」

ちよつとかんがえていたおかあさんが かよちゃんのなみだをふきながらいいました。

「わかったわ ようちえんのおつくえがかわったんで なかよしのおともだちと はなれてしまったんでしょう。」

「ううん。」

かよちゃんは首をよこにふりました。

「それなら おべんとうをのこして せんせいにおこられたの。」

「ううん。」

また首をふりました。

こまったようすのおかあさんでしたが か

よちゃんの顔をじつと見ているうちに はつと気がついたことがあるのです。

それは 夏やすみに海へ行つて 毎日おいだので おにいさんもおねえさんも もちろんかよちゃんも まつくろけにやけました。おとうさんは そんなみんなの顔をみて

「げんきに夏やすみがすごせて よかった。」と よろこんでくれたのですが かよちゃん が しんばいそうにいました。

「こんなにまつくろけで みんななんにもいわないかな。」

「だいじょうぶ。そんなにくろくなるまで海に行つていられたんだから かえつてうらやましがられるよ。」

そのことをおもいだしたおかあさんは あらためて かよちゃんにききました。

「お顔のことを だれかにいわれたのね。」
かよちゃんは

「うーん。」

といったまま だまってしまいました。

おかあさんは もうなんにもいいませんでした。

おとうさんと おかあさんにおやすみなさいをいって ふとんの中へはいったかよちゃんの耳にきこえてきたのは けんちゃんの声。

「くろすけ くろすけ からすのこ

まっくろ くろくろ からすのこ

かーお かーお まっくろ かーこ

ようちえんへ行くみちで かよちゃんの顔をみると けんちゃんがいるのです。

それまで仲よしだったけんちゃんが そんなことをいうんですもの。ようちえんへ行きなくなるのは あたりまえです。

そんないやな声が ふとんの中にまでおっかけてきたのです。

かよちゃんが おいはらおうとすればするほど くろくちばしの「くろすけからす」がおいかけてきてつつくのです。

耳をふさいで「まっくろ くろくろ」の聲がきこえないようにすると ゆびのすきまからくちばしをつつこんで「かーお かーお まっくろ かーこ」とうたいます。

それはつぎからつぎへと出てくるコンピュータゲームのように いつまでもどこまでももつづくのです。

どこへにげたら「くろすけからす」のくちばしがなくなるのでしょうか。

どうしたら「まっくろ くろくろ」の聲がきこえなくなるのでしょうか。

かよちゃんが

「もう ついてくるのをやめて！」
「うたうのやめて！」

といつても くらいとりは うたうのです。

「くろすけ くろすけ からすのこ

まっくろ くろくろ からすのこ

かーお かーお まっくろ かーこ

とうとう がまんのできなくなつたかよち

やんが さけびました。

「たすけて！ たすけて！ ナムナムさん

たすけて！」

おもわず大きな声で「ナムナムさん」をよ

んだのです。

この「ナムナムさん」というのは かよち

やんのようちえんにおまつりしてある きん

いろのほとけさまなのです。

いつも手をあわせて

「ナムナム ナムナム ほとけさま。」

といつておがむので みんなは「ナムナムさ

ん」とよんでいます。

その「ナムナムさん」を かよちゃんは、

どうしてよんだのでしょうか。よつぽど あ
のくらいとりが こわかつたのでしょうかね。

ところが ふしぎ ふしぎ。かよちゃんが

「ナムナムさん ナムナムさん」

とよぶたびに すぐうしろからついてきてい

たくらいとりが はなれて行くではありませ

んか。小さくなつていくのです。

そして いままで まわりでさわいでいた

「かーお かーお」のうるさい声が きこえ

なくなつていきます。

うれしくなつたかよちゃんは もっと大き

な声でいいました。

「ナムナムさん ナムナムさん。」

とうとう くらいとりは見えなくなりました。

た。声もきこえなくなりました。

「ナムナムさん ナムナムさん ありがとう。」

「かよちゃん なにをムニヤムニヤいって

るの。ほら、もう朝だからおきなさい。」

それは、おかあさんの声。

もしかしたら ナムナムさんの声も そんなやさしい声なのでしょう。

「よなかに、たすけて、」って、ねごとをいっていただけど、ねつでもあるんじゃないの。」
かよちゃんの おでこにのせたおかあさんの手。

もしかしたら ナムナムさんの声も そんなあたたかな声なのでしょう。

「ナムナムさん ナムナムさん ありがとう。」
かよちゃんが そつといったので、おかあさんは ふしぎそうにいました。

「なんなの そのナムナムっていうのは。」
「うふふ なんでもないの。」

あさごはんをたべると かよちゃんは たのしそうに ようちえんへでかけました。
むこうから きたのは、けんちゃんです。

かよちゃんの顔をみると いつものように「くろすけ——」。

といいだしたので かよちゃんは ニコニコ わらいながらいいました。

「げんきなけんちゃん ナムナムさん。」
いつもとちがうかよちゃんに、びっくりしたけんちゃんが

「くーくろーじゃなくて えーとくーくりくりめ玉の えーと かわいいかよちゃん ナムナムさん。」

と、いったものですから

「うふふ あはは ナムナムさん。」

「ふたりは わらいながらあるいていきます。」

きんいろ びかびか ナムナムさん
いつでも どこでも ナムナムさん

みんな なかよく ナムナムさん

と うたいながら。

(おわり)

み仏とともに

=5=

—苦しい小僧修行—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

京都の阿弥陀寺は、寺町今出川を上った右側にある大寺である。当時の住職は若山靈心という立派な方であった。団十郎ばりの顔をして、眉の濃い方であったと記憶しているが、子供心にはこわい和尚さんと写っていたように、今でも私はその顔を印象深く覚えていてる。

五十年振りに、或る日私はこの寺を、ひそかに訪れてみた。私が逃げ出した寺であるから、そんなに堂々と大きな顔をして訪ねる気持にはなれなかったのである。子供心には、馬鹿に大きな、暗い感じの寺と覚えていたが、久方に行ってみると、随分明るい小ざれいな寺であった。勿論、本堂は修理されたようで、大分昔と違ってさっぱりとしていた。しかし、書院や庫裡の方は、禪寺の様相を持って、昔のなりであった。去り難い感懐にふれながら、そこそこ散策、参拝してきた。

私はこの寺で、五十年程前に、約二ヶ月程、小僧生活を送ったのであった。朝は五時頃叩き起され、玄関の板の間などを、雑巾掛けしたことを覚えていてる。厭だったこと、苦しかったことだけが、おぼろげな印象として残っている。

その中で、一番印象に残っているのが、お経の練習で



——阿弥陀寺本堂——

あった。朝食が終ると、登校までの時間に、師匠は私に「仏説阿弥陀經」を教えてくれた。勿論これは、漢字ば

かりの折本で、仮名は一つもふつていないものであった。小さな机をはさんで師匠に向って正座した私は、師匠のいう一字一句を読んでいた。師匠と言えは、手に真鍮の火箸を持って、一字づ

つ指しながら、

「如是我聞、一時仏在……」

と四字づつ読んでは、私に暗誦させた。小学校四年生の私にとっては、見たことの少ない漢字ばかりで、とても読めたものでない。ただ師匠のいうなりに、暗誦するばかりである。私も木の箸を持たされていて、師匠が指したと同じように、字を指しながら、暗誦した。それは、字を読むというより、暗誦そのものであった。

一日に教えられる範囲は、せいぜい三行位であったであらうか。それを三回程教えられて、後は私が読むのであった。字で覚えているわけでないから、耳覚えである。「門前の小僧が、習わぬお経を読む」式のきき覚えであるが、昔の寺小屋の素読教育と同じで、結構それだけでも、暗誦できるようになった。

しかし、時には思い出せないで、行き詰ることもあった。一、二回目は行き詰ると教えてくれたが、三回目にはもう教えてくれなかった。黙って坐ったまま考えるが、なかなか次の句がでてこない。とうとうシクシク

泣き出してしまふ。しかし、師匠はこわい顔して、黙っている。時には知らぬ顔して、新聞などを読み始める。登校の時間は迫るし、坐っていて足は痛いし、とうとうワアッとはかり泣いてしまふことしばしばであった。

そんな時、側にいた師匠の奥さんが、そつと教えてくれることもあったが、時には、

「早くあやまって、教えてもらいなさい」

と忠告もしてくれた。しかし、わりに強情な私は、仲々に「教えて下さい」と言わないで、坐りつづけていたように覚えてゐる。

しかし、不思議なもので、こうして寺小屋の素読式に教えられたものは、忘れないもので、僅か三行ずつであったのが、一月程で、阿弥陀経を一通り終ったようである。そして、こうして教えてもらった阿弥陀経は、一度覚えたが最後にもう忘れないもので、堂々と宙で暗誦できるまでになった。そして、生涯忘れることがない。

このお経の訓練は、しかしながら厳しいものであった。この一件だけでも、私はもう我慢ならぬまでになつ

ていた。阿弥陀経の一文に、

「阿逸多^{あいつた}菩薩、乾陀訶提菩薩……」

という所があった。この時私は、兄の名が「伊太郎」というので、「あいつたばーさつ」という時、たちまち兄のことを思い出し、たまらずワーツと泣きだしてしまつたことを覚えてゐる。師匠は何故私が泣きだしたのか分らず、

「なぜ泣くのだ」

と大声と怒鳴り、火箸で私の頭を叩いた。しかし、強情な私は、その理由を言わず、ワーワー泣いていた。

寺修業が一月もたつたためかの中に、私はもうとても我慢ならぬほどに、修業が厭になつてゐた。そして、毎日泣いてばかりいた。小学校は湯川博士もでた京極小学校であった。寺には、その小学校の近くの女学校に行つていた娘さんが一人いた。始めの内は、可愛がつてくれたが、強情で泣いてばかりいる私に愛想がつきたらし



——京極小学校玄関——

く可愛がってくれなくなった。そんなこともあって、とても我慢ができなくなった私は、田舎の父母に何度か迎えにきてくれと、ハガキを書いた。それはたどたどしい字で、父母に苦痛を訴えた内容であった。

後で私は、このハガキを大切に保管していた母から、二、三枚見せられ、びっくりした。母はこれを大事に持っていたのである。それ程に、このハガキに母は苦しめられたに違いない。たどたどしい字で、

「もういやになつた。父さん、母さん、むかえにきてほしい」

と書いてあった。このハガキは今何処にある

か分らない。母が何処かにしまったまま、世を去ってしまったからである。

とも角、こうした日常であつたので、師匠もいささか困つたに違いない。或る日突然、父が田舎からやつてきた。驚いたり、喜んだりした私は、もう父を離さなかつた。父にしてみれば、一度顔を出して、何とか説得すれば、我慢するだろうと考えていたようである。しかし、私は、ここをせんとと、父にかじりついて決して離れなかつた。

「母親の顔を見れば、子供も納得するのではないですか。一度、田舎に連れて帰りなさい」

師匠はこう父にすすめたようである。そう言われればどうしようもなく、父はとも角、一度田舎に私を連れて行くことにした。それは、五月の中頃のことであつたであらうか。

私と父は、田舎に帰り、村の入口にある常光寺にとも角入った。人知れず忍び帰ったと言つてよい。

「明るい内は、村の人の目につくので、それまで寺にいなさい。日が暮れたら、家に連れて行き、母親に会わせなさい」

寺の上田純教上人は、そう父にさとした。父は私を寺に置いたまま、とりあえず家に帰った。夜になって迎えにくる積りであった。

私は一人、寺の座敷から、見るとはなしに、門前の道を見ていた。丁度、その日は雨が降っていた。学校帰りの子供達が、傘をさして、しゃべりながら帰って行くのが見えた。その中には、私の親しかった友達も幾人かいて、わあーつとばかり飛んでいきたい気持ちで一杯であった。しかし、私はどうすることもできず、一人でその光景をながめていた。

純教上人の夫人は、大変やさしいよい人であった。私に菓子などをだして、なにくれとなく、慰めたり、励ましたりしてくれた。

「お母さんの顔を見たら、すぐ又、京都に帰りなさいね」

そんなことも言われた。この夫人は、私が一人前になるまで元気でおられ、自分の子供の様に可愛がって下さった。

上田純教上人は、私が京都修業中に亡くなられ、実はこの時に会ったのが最後となっている。

日も暮れたので、寺で夕食を頂いた。その時のおかすがちりめん雑魚であったことまで覚えているところを見ると、余程この時の印象が強烈であったと思われる。そして、夜になって、家に連れて行ってもらえるのを、心待ちにまっていた。

私はこの時、すでにある覚悟をしていた。それは、二度と京都の寺に帰らないということであった。丁稚小僧になってもよい。あの寺には帰らない。そんな決意をして、父の迎えを待っていた。もう村全体は、夜の闇につつまれていた。

(つづく)

はこんな逸話を紹介する。

——問ウテ曰ク。念仏ハ実ニ往生ヲ得ルカ否ヤ。師(善導)答エテ曰ク。各々一蓮華ヲ弁ジテ行道七日、萎エザルハ即チ往生ヲ得

念仏が正しい往生業であるかどうか、と訊いたのは道綽の方だったのである。善導は答えて、蓮の花一輪をかざして七日間、行道をなさるがよろしい。その花がしぼまなければ間違ひなく往生を得られる。

「新修往生伝」はこれを受けて、道綽が実行して七日間の行道を試みたら「花ハ萎蕾セズ」で「綽ソノ深詣ヲ嘆ジタ」という。さらに善導は道綽に向って三つの罪を懺悔しなさいと説く。

一つは仏像を安置したが、それを疏略にして深房に居住したことはなかったか。

二つは出家した者を勝手に使用しなかったか。

三つは堂宇を建てたとき虫を殺しはしなかったか。

道綽は大きくうなずき、昔おかした罪を悔いた。その一つ一つを懺悔した。「師の罪はすでに滅した」と善導は言つた。このとき道綽の背後に白光が照りかがやき、立派な往生相を予示した、と書いている。

七十歳をこえた声望高い念仏者道綽が、白面の青年僧にすぎない善導からこんな教示を受けることがあり得るだろうか。古来「奇妙な伝説」とか善導を持ち上げるために造つた「下手な美談」などと黙殺されてきた。

この「瑞応刪伝」(以下略して「刪伝」とする)と「新修往生伝」(略称「往生伝」)には成立年次でかなりの隔たりがある。「刪伝」の作者少康の伝が「往生伝」にあって約百年の開きと推定される。おそらく「往生伝」の作者戒珠は「刪伝」の記事を下敷きにして内容を飛躍させたか、善導が別人相手にやったエピソードを転用したのかもしたない。

曲筆舞文の証跡として「刪伝」が一蓮華の「不萎」を淡々と紹介しただけなのに「往生伝」は「緯ソノ深詣ヲ嘆ジ」たり、三つの罪を大先輩道緯に懺悔させたりしている。余計な加筆のために師弟間の何気ない「試問」が大先輩道緯を教導する不遜な説法へと変質させてしまったからである。

まさしく道緯は若き善導へ「試問」を投げかけただけなのである。決して教示を請う目的ではなかった。

長安の都に住むという青年僧である。口で念仏者を自称しているが、果たして正しい仏法を踏まえた修法僧であつたかどうか。つい先ごろも、唐の太宗が西域の異教、ネストリウス景教が仏法かどうかをわざわざ問訊にきているのではないか。いや、この「刪伝」の記述自体が太宗の石壁山訪問の真意を間接手法で解明してはいなかったか。

「念仏ハ実ニ往生ヲ得ルヤ否ヤ」とあつさり問いかけてるのである。「各一蓮ヲ弁ジテ

行道スルコト七日、萎バザルハ即チ往生ヲ得」と善導はきっぱり答える。

この短いやりとりのなかで、念仏往生がまぎれもなく仏法であること、善導が純粋な浄土願生者であつたことを立証している。道緯もそれを確認したかったにちがいない。きめ手となつたのが蓮の花一輪である。

この一蓮が七日間の行道にかざして、しばむかどうか。判じ物の呪術ではない。仏法が求める浄土の実相を象徴した言葉なのである。

蓮の花は仏花である。

古代インドでは女性の生殖機能を象徴し、生命の創造をあらわした。婆羅門の經典ヴェーダには蓮の花で身を飾った女神が蓮台に立つ、と歌いあげている。仏教もこの民俗を受容して、蓮が仏陀の誕生を告知してその花弁を開いたとする。そして西方浄土を蓮の池で表現している。

じつは中国でも仏教渡来以前から蓮は「君

善導が道綽から学んだもの、それは浄土への願生を仏道修法の一方便とせず、正業として徹底させていることであろう。道綽自身の言葉をかりれば「古来より相伝して阿弥陀仏はこれ化身、またこれ化土なりという。これ大失なり……現に在ます阿弥陀仏はこれ報仏、極楽莊嚴図はこれ報土なり」であった。

阿弥陀仏や浄土を人間とかけ離れた化身や化土と考えるのは間違いである。阿弥陀仏は法蔵菩薩という生きた人間が誓願の深さと熱烈な修行によって仏となった報仏であり、極楽浄土もまた報土なのである、と断言する。その誓願の深さとは衆生救済である。

堅く結氷した氷上で、ひとすじの炎が燃えあがれば氷は溶けてしまう。しかも氷が溶ければ、その水は炎を消し去ってしまうであらう。

氷を人間の罪惡とし、ひとすじの炎を阿弥陀仏の誓願にたとえた。弥陀の慈悲で罪惡は消えるし、水にかえった氷、つまり凡夫はこ

の慈悲によって仏となり得るのだ、と強調した。

八

善導はどれくらいの期間、石壁山の道綽膝下に滞留していたのであろうか。道綽八十四歳での示寂が貞観十九年(六四五)の四月だから十年にみたない師事である。それも「統高僧伝」の文飾から察すると、長期滞留とは思えない。

——近有山僧善導者。周遊寰寓、求訪道津。行至西河、遇道綽師、惟行念仏弥陀淨業

各地に先輩良師を求めて周遊した。西河(山西省)に至り、道綽に遇った。専修念仏して弥陀の淨業をひたすら行ずる信仰に確信を

得たという。

「続高僧伝」の著者道宣はさらに文章をつぎ「既に京師に入りて広く此の化を行す。弥陀經数万卷を写す。士女の奉ずる者、その数は無量なり」と、長安の都における善導の本格的教化が開始されたことを伝えている。その教化の方法だが、文章は追いかけて「時に光明寺に在りて説法するに、人あつて導に告げて曰く……」と有名な若い信者の柳樹投身の事件を紹介するのである。

その投身事件はあとで詳しく触れることにして、善導の光明寺説法について書いておかねばならない。

光明寺は日本各地に浄土教の聖迹として「本山」の威容を誇っている。金戒光明寺、栗生野光明寺、鎌倉光明寺など、その代表的な名刹である。どこも光明寺善導の遺訓をしのんでの建立だった。

ところが長安、朱雀門街の東、北より第一を興南坊、朱雀門より南、第六横街以南、率

して（荒れて）居人の第宅無く……煙火に接せず、耕懇種々阡陌相連（畑地が延々と連なつた彼方）光明寺、と所在を明記されたこの寺は三階教団の説法場だったのである。

開元十三年（七二五）と言えば唐の玄宗の治世で善導の死後四十余年を経るが、三階教「禁制」の勅令が宣旨された。邪教と断ぜられたのである。

その「禁制」で三階教団の僧がみだりに諸寺院へ住みこむことを禁じた。三階教と関連が深かった長安城内の五箇寺に限った。

開祖信行法師が住した真寂寺——後に化度寺とも呼ばれ、無尽講の発端である無尽藏院のあった寺である。ほかに本濟法師が住した慈恩寺、道安法師が卒した趙景公寺、法藏法師が住した淨域寺、そしてあえて還俗して教団の拡大に慥腕をふるった裴玄証の妻賀蘭が晩年をすごした濟法寺。以上の五箇寺が指定された。そのほかに由緒深い道場として慧日道場と光明寺説教所が許されたのである。

光明寺は説教所ばかりではなく、三階教の中興とも言われた慧了法師が唐高宗の顯慶元年（六五六）八月五日に光明寺で寂している。有力な拠点だったことが立証される。

その慧了法師だが、善導と殆んど同じ時期に光明寺で説法をしている。しかも語る内容は末法観を軸点とした民衆救済の仏教だった。浄土教の念仏も六度の禪行中へ採り入れていた。

矢吹慶輝博士はその「三階教之研究」で書く。

——もしその後世の浄土教家が、淨影、嘉祥、天台等を以て諸師浄土教となすの例に従わんか、三階教もまた当然、その一つに加えられるべき資格あるものと謂うべし。念仏の解釈において諸師と善導と法然（親鸞）との相違あるも、等しく弥陀浄土の往生因果を論ずるを以て弥陀浄土教となすを得ば、ひとり三階教のみを諸師浄土より除外するの謂われあ

ることなし。いわんや一乗普法の浄土因果としては諸師の浄土教中これに類似の説をなすもの多々あるにおいておや。

もっとも矢吹博士は別の文章で、三階教の救済思想が邪法視された理由を適確に分析する。それは三階教の抬頭期に浄土教では曇鸞、道綽、善導という強力かつ明智の念仏者が輩出したため、その欠陥が目立ちすぎたのだった。

——この歴代集成の教義（曇鸞、道綽、善導の所論）を以て往々にして彼の体系不備、加うるに無援孤立の三階教に対す。三階教が遂に一籌を輸せざるべからざりしは、けだし当然の数と言ふべく、懷感（善導の弟子）が殆んど完膚なきまでに三階教を攻撃せるもの、その図って来るところ遠しと謂うべし。

懷感の駁論は「釈浄土群疑論」であって、

鋭くその末法觀を抉っている。

ところで三階教の成立だが、隋王朝が天下を統一したところ、信行法師という僧が魏の国に現れた。誰を師僧とし、どこかの寺で修法を積んだのか、誰も知らなかった。彼自身語ろうとはしなかった。

信行は末法論を強く主唱した。

この時代、中国における末法思想はその年次において区々まちまちであった。正法と像法の期限そのものが一定していなかった。正五像千、正千像五、正千像千、正五像五——この四説が採用されていた。ということとは末法思想が学説として論ぜられていたわけで、信仰実践へ直結していなかったことになる。

信行はどの經典を論拠にしたかは不明であるが、弟子三百余人を引きつれて長安の真寂寺へはいってきたとき、隋の開皇九年（五八九）であるが、すでに末法時代へ突入したと宣言したのである。釈尊の入滅時を数え違ったか、あるいは正法五百年像法五百年の「千

年説」を採用したのかもしれない。

とにかく末法時代へ突入した濁世の衆生は、罪惡にまみれた凡愚だから聖教に選択をすべきではない。法の優劣を口にしてはならない。第一階、第二階はすでに過ぎ去って、三階の末法仏教は普敬普行だと説いた。あまねく敬し、あまねく行するのである。

その実践行は徹底した布施、捨身である。信行自身が長安の街角に毎朝立って、重い車を押して行く人夫を助けてその尻を押したりした。また五十五歳で寂したときは、その死体を終南山にさらして鳥や獸がついばむままにまかせ「死施」することを遺言している。これは弟子たちによって実行され、終南山の靈地には百塔寺が建立された。

信行の寂後、三階教は隋の文帝によって「勅禁」の難に遇う。信行の入京時、真寂寺を建立して彼に供したのが隋朝の左僕射（大臣）高穎だった。高穎は江南の陳王朝攻略に功があり、さらに文帝の信賴深く朝政を一手

で司るようになった。開皇十九年（五九九）の春には突厥を破って凱旋してきた。だが待っていたのは失脚だった。

原因は王妃の妬心、それも皇太子の愛人を高額の息子が奪って妻としたためとあるが、それだけではあるまい。翌年三階教団に解散が命ぜられた事実でも明らかのように、三階教の強烈な布施行が信徒からおびただしい金品を集め、それが高大臣に献金され、隋王がその財力を危険視したことが真相だったようである。

「勅禁」の難に遇っても三階教団は挫けなかった。地下にもぐって着々とその教線を拡大していった。裴玄証のように、僧風を捨てて在家者の姿で法を説き、善男善女に三階教の実践行を奨励した。唐王朝が成立すると公然と復活、化度寺や光明寺などの拠点を新設して信徒を集めたのである。

善導は三階教の教義主張である普敬普行を否定はしなかった。「般舟讚序」で語ってい

る。

——同じく諸仏をもって師となし、法をもつて母となして生養す。ともに同じく情は親しく外に非ず。他の有縁の教行を輕毀し、みずからの有縁の要法を讀することを得ざれ。

おのれの教義だけを強調して、他宗を非難攻撃するような実践行を戒しめている。

だから善導が三階教の拠点である「光明寺に在りて法を説く」のも他意があったとは思われない。後世の浄土教徒がこじつけるように三階教と対決したり、これを折伏する意図はあり得ないであろう。三階教の道場で、浄土願生の法理をむしろ堂々と説いたにちがいない。

しかし、いかに普敬普行を容認しても善導がすでに内面で確固不拔なものとした専修念仏をねじ曲げることはあり得なかった。五濁に満ちた末法末世であればこそ、いっそう凡

夫はそこにひとすじの道を選択しなければならぬ、と強調したはずである。そんな善導に、体当りを喰らわせるように狂信的な三階教徒の若者が、「いま仏名を念ず。定めて浄土に生まるるやいなや」と詰め寄ったのである。

「阿弥陀仏の御名を念じ、唱えたら必ず浄土に往生できるのですか」

善導はきつばりと答えた。

「念仏すれば間違いなく浄土に生まれることが出来ます」

その人、礼拝しおわって、口に南無阿弥陀仏を唱え、声々あいつぎ、光明寺の門を出つ……と道宣の文章は続く。

門前の柳の樹によじのぼり、合掌して西方の空を伏し拝がみ、身をひるがえして飛びおりた。大地に激突して死んだという。

そして道宣は「事、台省に聞す」と結ぶのである。事件は政府機関へつたえられたとする。

これが宋代の「新修往生伝」となると、その投身自絶者が善導自身にかわっているのである。

善導の信仰、教条から考えて「自絶往生」などあり得ない。またその動かざる証固もある。

九

弟子となった懷感が初めて善導に会ったとき、往生の業に迷い善導から念仏の功德を説かれた。懷感は一七二一日間の断食行をおこなった。しかし、なお心の動揺はおさまらなかった。自分の煩惱はここまで深いのが、と彼は絶望し自殺しようとした。善導は固くこれを戒めて、自分の手もとに三年間おいで「生きるための念仏」を教えこんだのである。

その懷感が後年「群疑論」を書いて痛烈に

三階教団を批判した。光明寺における若者の投身自絶が事実だとすれば、これが三階教団側からの「仕掛け」ということも充分に考えられる。

現に過激な三階教徒のなかには「自絶行」を至高の往生と信ずる者が多かった。終南山へ自絶のために登頂した聖者（？）を、信者たちは麓で見送るのである。やがて自絶し果てて、その地点に死肉をついばむ鳥の群れが集ってくる。信者はこの鳥の群れを遠望して「死施」を讃嘆する厳肅な儀式が定例として実施されたともいう。

光明寺の柳樹自絶の「台省に聞する」には、そんな官憲の監視が連動してはいなかったであろうか。

善導が、三階教の普敬普行を容認しながらも、末法なるがゆえに実践行の選択を放棄したニヒリズムには、強い批判の眼を向けていたようである。批判の核は、その末法観だった。

末法となって何も出来なくなり、だからすべての仏を供養し、すべてを献げ尽すのでは人間が生きる意慾を諦めてしまったことになるではないか。いかに末法末世とは言え、そうであればいっそ熱烈に仏を、それも特別な一仏に慈悲を請うべきだと主張する。つまり末法だから、諦らめて念仏するのではなく、念仏が正しい行であるから末法の現在いっそそれに精励すべきだとする。この点は、日本の法然がその「選択本願念仏集」で明快な透析をしている。

——今また善導和尚、諸行を廃して念仏に帰せしむる所以は、即ち弥陀の本願なるがゆえなり。またこれ釈尊の付属の行なればなり。……中略……弥陀の本願、釈尊の付属、意（こころ）ここにあり。行者まさに知るべし。またこの中に退代（かだい）とは双巻経の意によらば、遠く末法万年の後の百歳の時を指すなり。これ則ち退（とお）きをあげて、

ちかきを撰するなり。しかれば法滅の後、なおもってしかなり。いかにいわんや末法をや。末法すでにしかり。いかにいわんや正法、像法をや。故に知んぬ。念仏往生の道は正、像、末の三時、および法滅百歳の時に通ず。

ここにある法滅百歳うんぬんは、「無量寿經」の末尾にある。

——われ今、もろもろの衆生の為にこの經法を説きて、無量寿仏と、及びその国土の一切の所有を見せしめたり。なすべきところあらば、みなこれを求むべし。わが滅度の後をもつて、また疑惑をいだくことなかれ。

——当來の世に經道、滅尽すとも、われ慈悲をもつて哀愍して、特にこの經をとどめて止住すること百歳。それ衆生ありて、この經に値う者は随意所願、みな得度すべし。

つまり積尊の經法がすべて滅尽したとしても慈悲を以て特にこの「無量寿經」をとどめて百年間止住する、と誓われたのである。念仏は末法末世の所産ではなく、積尊自身の誓願にもとづくものだった、と善導は主張し、法然はこれを受法している。

別な言いかたをすれば、固定化した末法觀を軸点にすべての思想、実践を回轉させること自体に非仏法の邪念がはびこってくる、と批判したのである。懷感もその「群疑論」で「如來の慈悲、何ぞ普法を説きて住世百年ならしめざると」と斬りつける。

こうして開明坊の光明寺において、三階院では慧了たちの三階師が普敬、普行を説くとき、その浄土院では善導が専修念仏を唱導しておびただしい善男善女を魅了しつくした。

そんなある日、聴衆のなかから見なれた顔が説法を終えた善導に近づいてきた。若き吏生の王徐明であった。

「どこへ帰るのですか」

何か語り合いたい様子である。善導が石壁山の玄中寺へ籠もったりしたため、久しぶりの再会だった。

「山の坊へ帰ろうと思っているが」

「私も新居へ移ることができました。よかったら一度寄ってくれませんか。今日は非番なので、ゆっくりお話できるのですが」

「新居が……」

善導は王徐明をあらためて見直した。服飾もとのつていいる。政庁における彼の地位が高まったことを物語る。

二人は畑地の多い開明坊から、道を王宮の方へ向った。城門をくぐると、俄かに民家が賑わいを見せはじめた。近ごろの長安の都は、月があらたまることと発展しているようである。

王徐明は朱雀大路を西の街区へ折れていった。「西ノ京」と呼ばれる商家が密集する繁華街だった。

「あんたの新居は？」

「それが面白いところにあるんですよ。無尽蔵院のすぐ裏手なんです」

「化度寺の境内かね」

「あの寺は朝晩、見ていると、じつに人の出入りが激しいですね。とりわけ持ちこまれる金品は政庁の商務省などとは比較になりません」

化度寺——無尽蔵院。三階教団の宝庫であつた。

「徐明よ、君はまさか……」

と昔の友を見つめた。

「そのとおりです。私は役目で、無尽蔵院を調べています。あなたからもいろいろとお聞きしたいのです」

きびしい役人の目つきになった。善導はやはり不愉快だった。無尽蔵院に近い新居というのは、秘密の監視所だったのである。

(つづく)

舞見御中

浄土宗宗議会議員

伊東康雄

龍泉寺住職

本山光明寺執事長

西念寺住職

北邨謙順

〒250-0111 南足柄市沼田三一五

回向院住職

本多清敏

〒130 東京都墨田区両国二一八一〇

稲田稔界

おてらはみなさんのそうだしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺
浄心寺

小池政雄

称名寺住職

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八一四
電話(〇一三八)二六―五二二五

中島真哉

青山梅窓院

〒107 東京都港区南青山二二六―三八

教安寺住職

野呂幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六一二
電話(〇四四)二二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口徳正

松庵寺内無為窟主

小川金英

〒025 花巻市双葉町六一四
仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―二二

正覚寺住職

楠美知行

光運寺住職

飯田信弘

〒510 四日市市中部三一―二二

舞見御中

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二一三一八
〒113 東京都文京区本郷一八一三 昌清寺 住職 服部光順 電話(〇三)八一三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六一三九八 浄運寺	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二一四 電話(〇二八)二二一〇八〇二	芳泉寺 柳^{なぎ}楽^ら真^{しん}純^{じゅん} 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七四八	浄土宗教学局長 大田秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七)三三三三・四〇〇〇	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟真寺 住職 立松 辨成 電話(〇五三)五二一五五六六

舞見御中

遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―二―四七 廣隆寺内	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二―五―一
お骨仏の寺 一心寺 貫主 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七二―〇三七一(代)	摂取院住職 聖徳保育園長 金子貫達 〒850 長崎市銭座町四―五九 聖徳寺中	大松寺 〒108 東京都港区三田四―一―三八	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町二―一―一	祐天寺住職 巖谷勝業 〒153 目黒区中目黒五―二四―五三

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙五／八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定	会費一カ年 金三、〇〇〇円 （送料不要）	浄土 五十一巻 八月号	昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 昭和六十年七月二十五日 印刷 昭和六十年八月一日 発行 編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷所 長谷川印刷所	東京都千代田区飯田橋一十一一六 発行所 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇三 振替東京八一八二一八七番
----------	-------------------------	-------------	---	--

舞見御中

総本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 善導寺

法主 一田善寿

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇一

大正大学

電話(〇三三)九一八七三二一代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九二一二四一代表
通信教育部 四九二一〇二三九

学校法人 大乗淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五三―七

京都文教短期大学

学長大橋俊有

〒611 宇治市旗島町八〇